

外国語活動におけるICTの活用とその効果

茂木 淳子*

1. 研究の背景

1.1. 小学校外国語活動が果たす役割

外国語活動が本格実施となって、2年が経過した。2年間で30時間の研修が課せられた先行実施期間とは異なり、学校内外の体制も整い、“Hi friends!”に準拠したデジタル教材を使ったり、文部科学省が示す関連資料を活用したりすることもできるようになった。外国語活動がスタートしたばかりのころの指導者側の混乱は、終息したかに見える。

小学校における外国語活動は、滑走路にたとえられる(文部科学省, 2008)。外国語を体験的に学ぶその先に、中学校からの英語教育がスタートするのである。以前は、このような滑走路がないまま、中学校でいきなり抽象的な規則を教え込まれることとなり、その結果、たくさんの英語嫌いを生み出してきた(吉田, 2012)。では、外国語活動が本格実施となった今、滑走路が有効に作用しているかという、そうではない。高学年児童の情意面での低下が課題とされている(JES課題研究グループ, 2013)。小学校における外国語活動が、その役割を十分に果たすには、いかにして、児童の意欲を高め、保持しつつ中学校へと橋渡しするのかを明らかにしなければならない。

1.2. 外国語活動におけるICTの活用

ベネッセ(2010)の調査によれば、ICTを活用した指導力が十分にある教員は、教科指導などに比べるとまだ少ない。しかし、半数以上の教員が十分できていると判断される学校が80%であることや、予算不足により十分なICT機器をそろえることができない学校もあるという現状を考えると、必ずしも不十分であるとは考えにくい。

同調査によれば、外国語活動におけるICTの活用状況は、理科、社会に次いで3番目に多く、25.2%を占める。外国語活動を担当する教師が4回に1回はICTを活用していることになる。ところが、児童がICTを活用する場面は、6.4%にすぎない。社会科では、児童のICT活用が55.2%で最も多く、次いで理科が38%である。これらの教科では、与えられた課題をもとに児童が調べ学習などで活用する場面が多い。一方、外国語活動では実施期間の短さゆえ、どのような場面で児童自ら活用できるのか、未開発であると推測される。

廣江ら(2012)は、ICTありきの授業への警鐘を鳴らしている。当然のことながら、ICTの利用が目的ではなく、どんな学びを求めるのかが重要であり(広瀬, 2012)、学習成果の向上を目指した発想が必要とされている(吉田, 2012)。

文部科学省(2011)は、学校外・海外との交流活動を通じてお互いを高めある学びを推奨しており、ICTは時空を超えて、人と人とのつながりを高めるのに適している(竹内, 2012)。国際交流においてICTを効果的に活用することで、自然な場面での交流が設定できる。鶴狩ら(2003)は、テレビ電話を活用した国際交流授業で、興味・関心をもって取り組み、達成感を得ることができると報告している。このように、外国語活動におけるICTの有効な活用方法を開発・実践することは、意義がある。

2. 研究の目的

本研究の目的は、ICTを活用した児童の国際交流活動の効果を明らかにすることである。

3. 研究の方法

3.1. 参加者：小学6年生の児童40名

3.2. 実施時期：2013年4月～2013年7月

* 上越教育大学附属小学校

3.3. 測定方法

- ① ARCS動機づけモデル四要因と下位分類に基づく16の評価項目9段階尺度によるアンケート
- ② Can-Do評価と自由記述
- ③ 交流方法に関するアンケートと自由記述

3.4. 分析方法：直接確率計算

3.5. 単元の構想と単元計画

本単元“Look at this! ～It's my hometown.～”は、外国語活動、国語科の学習、総合的な教科活動とも関連付けた内容である。国際理解をテーマとした総合的な教科活動では、様々な国の人との交流を図っている。その中の一つ、オーストラリアの小学校との交流では、代表児童による学校訪問といった直接的な交流のほかに、テレビ電話を利用した会話や手紙のやり取りを楽しんでいる。本単元では、国語科「ようこそ、わたしたちの町へ」の単元の学習で作成した学校や学校周辺の町の魅力を伝えるリーフレットを活用し、それをもとにビデオレターを作成することとした（表1）。

表1 単元“Look at this! ～It's my hometown.～”の内容と時数（1Mは30分）

	内 容	時数
第1次	Happy travel letterをつくろう ・取材内容をまとめる。 ・リーフレットを作成する。	6 M
第2次	ビデオレターの準備をしよう ・ビデオレター作成の計画を立てる。 ・内容を決め、準備する。 ・班ごとに練習する。	6 M
第3次	撮影しよう 班ごとにビデオ撮影をする。 活動をふり返り、Can-Do評価をする。	4 M

3.6. 活動の様子

あるグループでは、学校周辺のお店にある和菓子を取り上げた。「はす青葉」というお菓子は、高田城のお堀にあるハスの葉をイメージして作られたものである。この和菓子と日本語の「青」が意味するところを紹介する原文を考え、ALTが英語に訳した。

これは、「はす青葉」というお菓子です。

(This sweet is called “hasu aoba”.)

このお菓子は、ハスの葉をイメージして作られています。

(This sweet was made in the image of lotus leaves.)

「青葉」は青い葉っぱです。青くありませんけどね。

(Aoba means blue leaves. It's not blue, though.)

日本では、青は、青、緑、寒色や清涼色を意味します。

(In japan, blue can mean blue, green, cold and cool colors.)

このお菓子は、さわやかな味で、もちっとした食感です。

(This sweet has a fresh taste and a chewy texture.)

食べてみたいですか？

(Would you like to try it?)



以前のビデオレターづくりで、「発音に自信がもてない・不安である」といった自由記述がみられた（茂木，2013）ことと、かなり難しい英文であったことから、何らかの手立てが必要であると判断した。そこで、ALTが一文ずつ、ていねいに発音している動画を用意し、班ごとにタブレットPCを活用して練習できるようにした。児童は、自信をもってしっかりと話せるようになるまで、練習を重ねていた。

また、英文の発音に慣れ、セリフを覚えてからは、紹介する自分たちの様子をタブレットPCで動画に収め、再生して見ることで改善点を探した。「もっと大きな声で話そう」「カメラ目線で話した方がいいね」「紹介するものを見やすくしたほうがいい」など、たくさんのアイデアが出され、ビデオレターをよりよいものにしようとする姿が見られた。



4. 研究の結果

4.1 タブレットPCを活用した授業の効果

これらの活動後に、ARCS動機づけモデルに基づくアンケートを実施した。項目ごとに集計し、平均（ M ）と標準偏差（ SD ）を求め、表2に示した。9段階尺度の本アンケートは、9が肯定、5が中立、1が否定である。そこで、6以上を「肯定群」、5以下を「中立・否定群」とし、4：5の母比率不等で直接確率計算をした。

その結果、16項目中14項目において、肯定的な回答が中立・否定的な回答を有意に上回った。

表2 ARCS動機づけモデルに基づく16項目の平均値（ M ）・標準偏差（ SD ）と分析結果

		M	SD	肯定	中立・否定	p		比較
A	注意	7.58	1.73	32	8	.00	**	肯定>中立・否定
A1	知覚的喚起	7.60	1.56	34	6	.00	**	肯定>中立・否定
A2	探求心の喚起	7.10	1.67	30	10	.00	**	肯定>中立・否定
A3	変化性	6.13	2.24	25	15	.02	*	肯定>中立・否定
R	関連性	7.50	1.75	31	9	.00	**	肯定>中立・否定
R1	親しみやすさ	7.38	1.81	34	6	.00	**	肯定>中立・否定
R2	動機との一致	6.78	1.78	31	9	.00	**	肯定>中立・否定
R3	目的指向性	6.95	2.19	31	9	.00	**	肯定>中立・否定
C	自信	6.48	2.12	23	17	.07	†	肯定≒中立・否定
C1	学習欲求	7.58	1.58	33	7	.00	**	肯定>中立・否定
C2	成功の機会	6.35	2.30	26	14	.00	**	肯定>中立・否定
C3	コントロールの個人化	6.43	2.05	26	14	.00	**	肯定>中立・否定
S	満足感	6.93	2.38	27	13	.00	**	肯定>中立・否定
S1	自然の結果	6.98	1.90	29	11	.00	**	肯定>中立・否定
S2	肯定的な結果	6.33	2.10	22	18	.12	<i>ns</i>	肯定≒中立・否定
S3	公平さ	7.80	1.68	32	8	.00	**	肯定>中立・否定

† .05< p <.10 * p <.05 ** p <.01

4.2 自己評価と自由記述





Can-Do評価の平均値 (M)・標準偏差 (S) を表3に示す。右に示す「いいね」と「最高」を肯定的回答, 「最低」と「まあまあ」を否定的回答とし, 直接確率計算をした。結果, 肯定的回答が有意に上回った (表3)。

表3 Can-Do評価の平均値 (M)・標準偏差 (SD) と分析結果

M	SD	肯定的回答	否定的回答	分析結果
3.18	0.51	32	8	片側検定 $p=0.00,$ $p<.01$

外国語活動(ビデオレター)の振り返り

あなたの達成度は? 1つ選んで、色をぬりましょう。

最低  ◎ 何も紹介できなかった	まあまあ  ◎ 少し紹介できたけど、イマイチ	いいね  ◎ ちゃんと説明できた。	最高  ◎ ちゃんと説明できた。 ◎ はっきりと発音したし、カメラ目線で話せた。
↑これを選んだ理由は何ですか? 「はきはまと話せて、それに『笑顔』で楽しく出来たのよ!!」 「最高」は「7よめ」と思いました。			
☆ビデオレター作成についての感想を書きましょう 班のみんなが楽しく準備して、本番は楽しく出来たよか。よかった。			

自己評価における自由記述には, 以下のような記述が多く見られた。①の記述は, 仲間との協力に関する記述である。②は, 難しいことに挑戦し, 達成感を得たことである。③は, 一応の満足感を得ながらも, 別の課題を見出している様子である。

- | |
|--|
| ① 班のみんなと, 協力して取材したり, 撮影したりして, 成功したのでよかったです。 |
| ② 最初は, こんなに難しい英語が言えるかな? と思ったけど, ちゃんと説明できてよかったです。 |
| ③ 1回も間違えずに言えたし, ちゃんと説明ができた。でも, 表情やリアクション? がもう少し, 大きくできたんじゃないかなと思う。 |

4.3 交流方法に関するアンケートと自由記述

表4 ビデオレターとテレビ会議システムの利点の比較

ビデオレターの利点	テレビ電話の利点
<ul style="list-style-type: none"> リアルタイムじゃないから, 緊張しない。 落ち着いて話すことができる。 仲間と一緒にやる方が楽しいし, 安心できる。 画像の乱れが少なく, 相手に伝えやすい。 	<ul style="list-style-type: none"> 相手と1対1で会話を楽しめる。 相手の目を見て, 話しができる。 すぐに返事が来るからいい。

表5 交流方法の比較の平均値 (M)・標準偏差 (SD) と分析結果

M	SD	ビデオレター	中立	テレビ会議	分析結果	ライアンの名義水準を用いた多重比較
6.68	2.44	22	13	5	$\chi^2(2) 26.66$	ビデオレター>テレビ会議

** $p<.01$

児童は, 本研究の前年度からオーストラリアとの交流を行っている。テレビ電話による英会話とビデオレターの交換を比較して, どちらが好きかを問うた。9段階尺度のうち, 6以上はビデオレターが好きであり, 5は中立, それ以下がテレビ電話の方が好きと答えている。ビデオレターとテレビ電話, それぞれのよさを自由記述から挙げる (表4)。

交流方法に関するアンケートの平均値 (M)・標準偏差 (SD) と分析結果を表5に示す。直立確率計算の結果, 有意差があった。ライアンの名義水準を用いた多重比較により, 交流方法としてのビデオレターが, テレビ電話を有意に上回った。

5. 考察

4.1の結果から、ICTを活用した児童の国際交流活動は、以下のようにいえる。

- ▶Attention：児童の注意を引き、興味を持続する内容であった
- ▶Relevance：児童がやりがいを感じ、プロセスを楽しめるような内容であった
- ▶Confidence：児童の自信を高める傾向はあるものの、十分ではなく、別の手だてが必要である
- ▶Satisfaction：児童が「やってよかった」と満足できる傾向はあるものの、完全に満足しているわけではない

AttentionやRelevanceの項目に関して、Can-Do評価の自由記述（4.2）と交流方法に関するアンケートの自由記述（4.3）の結果から、仲間との協力体制がよい影響を与えたものと推察される。興味のある内容を仲間とともに構成し、多少の困難を感じながらも仲間で助け合い、練習を重ね、撮影に挑むことで達成感をあじわったのであろう。

本研究では扱っていないが、4.3の交流方法の比較においては、個人の英語力との相関が考えられる。もともと英語に対する自信があるからこそ、相手の英語を理解し「相手と1対1で会話をし、すぐに返事が来る」ことを楽しめるのだろう。英語に対する自信がない児童にとっては、テレビ電話よりも、ゆっくりと準備し、失敗したら撮影しなおすことのできるビデオレターが好ましいのではないだろうか。いずれにせよ、Confidenceの項目に関しては、1度のビデオレター作成で十分な自信がつくとは考えにくい。外国語活動に対する自己効力感を高めながら、価値ある体験を積み重ねる必要がある。

Satisfactionについては、4.2の結果から、児童が現状に満足することなく、よりよいものを目指して自ら新しい課題を見付けている状態であるといえる。つまり、児童の向上心を刺激したという点において評価に値すると思われる。

ICTを活用した外国語活動では、児童中心の協働学習とすることで、お互いを高め合う学びが成立したといえる。

6. 今後の課題

児童がICTを効果的に活用するさらなる外国語活動の開発とその効果を検証する。

引用・参考文献

- 鵜狩歌織・辻慎一郎・園屋高志 「離島の極小規模校におけるICTを利用した国際交流授業の実践とその効果に関する研究」, 2003年
- JES課題研究グループ 「小学校外国語活動における評価のあり方：児童の学びの支援に関する研究」 小学校英語教育学会沖縄大会 課題研究発表, 2013年
- 竹内理 「ICT活用の8つの指針」『THACHING ENGLISH NOW』23, 2012年
- 廣江顕・畑田秀将 「ICT活用型授業への警鐘」『尚学園研究紀要. A, 人文・社会科学編』6, 2012年, pp.87-98
- 広瀬一弥 「小学校におけるICT活用の現状」『英語教育』60(13), 2012年, 17-19pp
- ベネッセ 「第5回学習指導基本調査」, 2010年
- 茂木淳子 「人と人をつなぐICTの有効活用」小学校英語教育学会沖縄大会 口頭発表, 2013年
- 文部科学省 『小学校における英語活動等国際理解活動指導者育成研修資料』2008年
- 文部科学省 『教育の情報化ビジョン』, 2011年
- 吉田研作 「小学校教育と外国語教育における外国語活動の役割」『初等教育資料』(886), 6-9, 2012年
- 吉田広毅 「ICT活用英語教育のいま」『英語教育』60(13), 2012年, 10-13pp